

課題と強み知り自信

熱帯ならではの背が高い木々が揺れるシンガポール。8月24日午前。ガラス張りのビルの一角に拠点を構える「NEC Asia Pacific」の会議室で、シンガポール人の男性社員が熱心に語り掛けていた。「文化の違いに敏感になることが大事」「日本人は上司に『はい、はい』と従うでしょう。でも僕たちはNOとも言つ」。中国語の響きをまじった英語を高速で繰り出し、グローバル企業で働く心構えを説く男性に、県立大国際経営学科の6人は圧倒されていた。

学生約40人は8月中旬から9月にかけて東南アジアの有名日系企業や公共団体に身を置き、約3週間にわたってインターンシップ（就業体験）や座学に取り組んだ。東暖子さん（20）もテーブルの端から真剣なまなざしを送っていた。「力のなさを痛感して嫌になることもある」

東さんの主な研修先は西海陶器（東彼波佐見町）。シンガポール最大のアウトレットモールに事務所と倉庫を持ち、日系百貨店やシンガポール内のネットスーパーで食器販売などを手掛ける。将来英語を使う仕事をしたい、大好きな陶器に関わりたい。そんな思いで選んだが、その前に壁が立ちばだかった。現地スタッフと同じ職場に机を並べ、見積書の作成や在庫確

学生の収穫



シンガポール人の男性社員の説明に耳を傾ける東さん（右から3人目）ら
＝シンガポール、NEC Asia Pacific



□
1
□

認の業務に携わった。だが話し掛ける勇気はなく、どんな言葉を使えば自分の思いが通じるか、悩んだ。

大学では、TOEICの目標スコアを地道に達成して英語力を身に付けたつもりだった。だが英語で自分の意見を伝える経験が足りなかったと痛感。「きちんとした英会話でなくても自分から話そう。ジェスチャーを使ったり、一緒に昼食に行ったりしながら少しずつ壁を崩した。大学3年の夏休み。この時期

になると民間企業はこぞってインターンシップを開き、ほかの学生は会社と接点を持ち始める。東さんも、いくつもの会社への参加を諦めた。だが海外の現場で体当たりで身に付けたコミュニケーション力や自主性は、出合いの数以上に就職活動で乗り切る強みになると実感している。この時期の研修だから意味がある。背筋が伸びた。ほほ笑んだ表情に自信がにじんだ。

※ ※

就職活動が短期決戦となり、PRや人材確保のために企業がインターンシップに力を入れる中、学生を社会に送り出す大学も力リキュラムを進める。県立大は全国の国公立大で唯一、一部の学科で必修化に踏み切った。18歳人口の減少や若者の県外流出などの課題を抱える本県、県立大の狙いや企業の思い、今後の在り方を探る。

（この連載は佐世保支社・嘉村友里恵が担当します）

メモ

インターンシップ 企業が学生に就業体験の場と機会を提供する取り組み。1990年代後半から学生のキャリア形成支援や人材育成のため推進された。1日かつ1カ月以上であるが、2017年に経団連が日数要件を撤廃し「1日型」を中心とした短期プログラムが広がっている。欧米では採用の可否を見極める前提で2〜3カ月の長期間で実施することが多い。